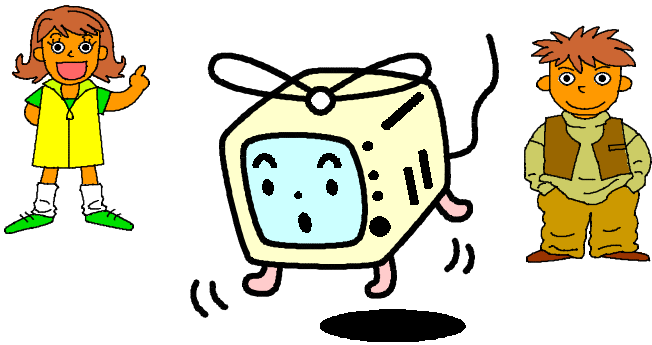


テーマ	メディア・リテラシーの視点から
-----	-----------------

事業名	 メディアレストラン ～中学生のためのメディア・リテラシー講座～ 
-----	--



1 個別事業計画（学習プログラム）

(1)事業名	メディアレストラン ～中学生のためのメディア・リテラシー講座～		
(2)事業の目的	メディアの受容能力を養うことをとおして、人権感覚を高める。		
(3)実施主体	もでる市メディア・リテラシー研究開発事業実行委員会 ※もでる市：人口10万人 ・教育関係者 大学教授（情報教育）、市内中学校情報教育部会代表、社会教育主事 ・民間関係者 商工会議所広報担当、広告代理店コピーライター、新聞記者、NPO ・行政関係者 市広報担当、総合福祉センター専門職員等 計10名		
(4)参加対象・定員	中学生 各会場30名 （30名×10会場）		
(5)学習期間・時間（回数）	7月～8月	1回の学習時間	3時間×6回 計18時間
(6)学習場所	もでる市内各公民館、生涯学習関連施設、コンベンションホール等10カ所		
(7)学習目標	人権の視点でメディアを読み解くことにより、人権に配慮した情報について理解する。		

(8)プログラムの展開 網掛けは「遠隔学習」を導入、メイン会場からサブ会場（9会場）へ

回	学習テーマ	学習の内容と方法（◆内容、○テキスト、※方法）	学習支援者	備考
1	メディアってどんな味？	◆アイスブレーキングとグループづくり（5人程度） ◆メディアの種類と特徴について知る。 ◆ニュース番組づくりの基礎と、制作技法を知る。 ・広告の長さ、編集方法、音声、カメラワーク等 ※講義	ファシリテーター テレビ放送局ディレクター	・芸能的な番組を素材にしたアイスブレーキングを取り入れ、メディアについて関心を向ける。
2	「ニュース番組」を食べる	◆TVニュースを読み解くことにより、メディアは、「現実」をどう構成しているかをつかむ。 ◆MLの内容と学習方法を実践的に理解する。 ◆選択テーマの展開方法について理解する。 ◆報道規制をすべきか否かの問いかけをし、発表会に向けての方向付けを知る。 ○「京都小学生殺人事件」報道 ※テキスト分析とグループ・ディスカッション	ファシリテーター 2名 各会場に実行委員	・「食べる」を「受容」と捉え、メディア側の「意図」と視聴者の「思い込み」により「現実」がつけられていることを知る。
3 4	市場で仕入れ 厨房で仕込み ～メニュー選択と分析～	◆グループ毎に8つのメニューからテーマを選択し、メディアが描く情報について、 人権の視点で読み解く 。 ①「サザエさん」を食べる ※C ○食卓場面【ジェンダー】 ②「化粧品CM」を食べる ※C ○化粧品CMの出演者【国際理解】 ③「ストリートファイター」を食べる ※D ○対決型ソフトの構成【暴力】 ④「ビューティフル・ライフ」を食べる ※C・R ○ドラマ出演者の年代別出現率【高齢者理解】 ⑤「街の看板」を食べる ※F ○広告看板の種類と内容の調査と検証【障害者理解】 ⑥「毎朝新聞」を食べる ※R ○プライバシーと実名報道【子供の人権】 ⑦「折り込みチラシ」を食べる ※C ○キャッチコピー、見出し【ジェンダー】 ⑧「エイズ報道」を食べる ※R ○過去のエイズに関する記事【HIV感染】	ファシリテーター 6名 各会場に実行委員	※方法 D：ディベート R：リサーチ C：コラージュ F：フィールドワーク 多角的、公正に情報が構成されているか、欠落している情報は何かを観る眼を養う。 ・アメリカのVチップの紹介。
5	レシピをつくろう	◆寸劇、ディベート、パネルフォーラム、ビデオ化等の様々な発表形態の中から選択し、グループ毎に発表に向けてプレゼンテーションを準備する。	ファシリテーター 6名	・メディアの功罪を精査しながら相互理解を図る。
6	メディア試食会	◆グループ発表により、人権に配慮した報道とは何かをつかみ、学習したことを共有する。 ◆メディアの受容能力を高めることが、人権感覚を磨き、行動につながることを認識する。	ファシリテーター 6名	・「総合的な学習の時間」に向けて、プログラムを提供し、発展させるよう配慮する。
		◇アンケート実施		

2 アクティビティの展開

第 2 回	学習テーマ	「 ニュース番組を食 べる 」
アクティビティのねらい	メディア側の「意図」と視聴者の「思い込み」により「現実」がつくられて入ることを知る。 ①TVニュースを読み解くことにより、メディアは「現実」をどう構成しているかをつかむ。 ②メディア・リテラシーの内容と学習方法を実践的に理解する。 ③選択テーマの展開方法について理解する。	

【準備するもの】 ☐ 「京都小学生殺人事件」ニュースVTR（5分間） ☐ テレビ、ビデオデッキ各1台 ☐ 遠隔学習のための機材一式（各会場毎） ☐ 分析シートA（記載例が示されているもの） ☐ 分析シートB（虫食い形式） ☐ 模造紙2枚×6グループ ☐ ポストイット ☐ マッキー（6色）6組 ☐ ホワイトボード ☐ BGM（グループ活動時） ☐ 夏の生花（持ち寄り）	【会場図】 ↓ホワイトボード ☐ ←テレビ ☐ ←模造紙が掲示可能な壁面 ☐ 1グループ5人編成
---	---

流れ	時間	学 習 活 動
導 入	20	1 アイスブレイキング「わたしはピカソ」 ・グループ内で絵を描き、完成した絵のテーマをグループに決める。 ・他者理解とグループの雰囲気づくりを図り、学習の見通しを知る 2 「京都小学生殺人事件」ニュースを読み解く視点について知る。 Q.なぜ、「中学生が加害者である可能性が・・・」と報道されたか？
展 開 休憩は 適宜	20 20 60 40	1 テキストを見る。 ・テキストの内容（経過等）を聞き、VTRを見る。 2 メディア・リテラシーを知る。 ①メディアを社会的文脈で、クリティカルに観る視点 ②ニュースは現実をどう構成しているか。 3 分析する。 ①VTRを観る ②個人の分析を発表し、グループでまとめていく ・記者のコメント、テロップ挿入されている音声等、映像及び音声技法等 ③話し合いのポイント ・VTRの中で取り上げられていない事項で重要だと思うこととその理由 ・報道により関係者の人権が損なわれていないか 4 グループで発表する。 ①分析をもとに発表資料を作成し、役割分担をする。 ②2つのポイントを押さえて発表をする。 i どのようにして中学生が犯人と考えられたか ii メディアと人権の関係について ◆テキストの内容 ・「京都小学生殺人事件」VTR 5分20秒（AAA放送） 1999年〇月×日夕方放映、 ・ニュースでは、事件の経過をドキュメンタリー風にまとめ、事件の犯人像に迫るため、目撃者の証言や心理学者のコメントなどから「中学生から高校生ではないか」とコメントしている。被害者の父親のコメントあり。警察関係者のコメントは収録されていない。 ◆分析シートの内容 登場人物（性別・年齢）の発言、場所、カメラワーク、キャスト、音声等 2つのポイント i 事件の背景からの思いこみ ii 目撃者の証言からの思いこみ ◇作品評価
ふりかえり	20	1 まとめをする メディアによる人権侵害の例として、松本サリン事件の報道を提示しながら次のことについて話し合う。 ①報道の自由はどこまで許されるか ②報道規制は、「すべき」か、「否か」 ・この話し合いは、次回、第3回、4回の活動へ向けての視点となる ・報道規制の必要性をあえて強調

網掛けは「遠隔学習」を導入。講義内容については、メイン会場からサブ会場（9会場）へ配信、双方向

3 事業評価表

(1) 事業評価の視点		①学習者がメディアの受容能力を養うことをとおして、人権感覚を高めることができたか。 ②各メディアの受容能力を養い、人権感覚を高める効果的なプログラムを作成できたか。
(2) 評価方法		①目標に基づく評価 ②事例研究による評価 ③合議制による評価
(3) 評価のデータを収集する対象者／技法		◇作品評価法 ◇質問紙法 ◇インタビュー
(4) 評価時期		展開中（▲グループ発表時、●事業の最後）、展開後（◎一定期間の後）
(5) 評価の対象領域	(6) 評価項目・基準	(7) 留意点・備考
学習成果に関するもの	1 目標に基づく評価・・・・・・・・作品評価法による評価 ①問題意識の共有化がなされているか。 ②メディアの特徴を押さえているか。 ③テキストを解き明かす視点が適切であるか。 ④人権感覚の共有化がなされているか。 ⑤人権という視点でテキストを正確に捉えているか。 ⑥学習成果を正確に表現できているか。 ⑦適切な方法でプレゼンテーションをしているか。 ⑧発表に全員が参加しているか。	▲グループ発表時に <u>ファシリテーター</u> が評価
	2 事例研究による評価・・・・・・・・質問紙法による評価 ①教材に興味関心が持てたか。 ②メディアを読み解く方法が身についたか。 ③学習内容が理解できたか。 ④ソフト（教材・ビデオ等）が適切であったか。 ⑤助言者のアドバイスが適切であったか。 ⑥人権感覚が高まったか。 ⑦実施時期・時間数は適切であったか。 ⑧さらに学習を進めていこうとする意欲が生まれたか。	●事業の最後に <u>学習者</u> にアンケートを実施し、評価する
学習活動を支援する条件整備に関するもの	3 合議制による評価・・・・・・・・インタビュー法による評価 ①学習内容が中学生のニーズに合っていたか。 ②全員が参加できるようなプログラムの進行ができたか。 ③メディアを読み解く方法が理解できるプログラムであったか。 ④メニューの種類と内容が、人権感覚を高める上で適切であったか。 ⑤ソフト（教材・ビデオ）の内容が人権感覚を高める上で適切であったか。 ⑥助言者のアドバイスが適切であったか。 ⑦時間配分が適切であったか。 ⑧総時間数が適切であったか。 ⑨遠隔学習は効果的だったか。 ⑩実行委員会は適切に機能したか。	◎事業後、作品評価法及び質問紙法による評価を集計分析し、10会場すべての資料を集計した後、 <u>実行委員会</u> を開催し、総合的に評価し、次の事業計画の提言を行う。 特に学習者の評価とファシリテーターの評価の差異を分析することにより、評価に客観性を持たせる。

